VITALITE
生命力について

神社本庁総長
白井　永二
愛知県出身。大正４年生まれ。国学院大学卒。鎌倉鶴岡八幡宮宮司。

●聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿　代表取締役社長

佐多：かねてより先生から、日本の神道は宗教ではなく文化だ、というお話を伺っておりますが。

白井：はい。神社は宗教法人ですが、神道は区別して私はそう申しています。日本では戦前は仏教が宗教の主流でしたから、宗旨という言業が使われていました。お宅の宗旨は何ですかと聞きますと、禅宗だとか、浄土宗というふうに答えたわけです。神道は神式、仏式と区別する位でした。お正月には、神社に8000万人余りがお詣りされるでしょう。井戸の神様から、竈（かまど）の神、厠（かわや）の神にも、お正月の注連縄飾りをして、八百万（やおよろず）の神様をお祀りします。

自動車や工作機械にも正月のお飾りをつけるのは、神様をお迎えしてお祀りする新しい型でしょう。それぞれの神様が私どもの傍にいて、いつもお守り下さるのです。

それが、「一神教」の人々には、いわゆる「宗教」がないように見えるようです。日本人が外来の宗教である仏教を受け入れながらも神道を持ち続けたのは、上代の人が「仏の教」と「神の道」との違いを認識し、固有の神道と区分したことによるのだと思います。神道は「神の道」、即ち神の行った通りに人も行うという考え方でしょう。「教」を中心にしたのが仏教であり、宗教だということです。

日本の仏教学者に、宗教の宗は「もと」であるという、悟りの根源を説かれる方があります。日本人の一番の「もと」は神様なのか自分なのか、そのどちらでもあろうと私は考えます。

日本人としては、道を誤らずに自己をみつめつつ生きているということ、「心」の問題でしょうね。神様に見透してもらう姿勢です。それが「もと」ですね。例えれば扇の要（かなめ）のようなものです。扇に何が描いてあってもいいが、要（かなめ）がバラバラになったら用をなしませんし、機能しません。こわれものです。この要（かなめ）が、先祖以来「親の背」を見て育った自分の心であり「もと」なんだと思います。

佐多：神道は善悪の判断をしないで「場」を設定していると言いますか、何となく奇妙な感じもしますが、何か、たいへん意義深い時間と空間の「場」を与えているような気がしますね。ただ、人にはバイブルのようなものが必要なのではないでしょうか。

白井：神道にはバイブルはないですね。ただ、先祖代々の歴史伝統を継いで生きて来たことが神の道であり、生きる場といえるのでしょうか。ある意味では自己の赴くままで、融通無碍というか、一即多、多即一だが、統一性はある、箍（たが）はあるんだと思います。

佐多：神道の考えでは人間が死ぬ時は息が止まる時だとされていますね。ところが、医療の世界では、今、人工呼吸器を使いますと、本来なら息のできない身体でも呼吸が続くんです。脳が死んでいてもですね。そこに脳死や臓器移植という非常に難しい問題が出て来ました。

白井：日本には古くから、殯（もがり）という習慣があります。一定期間死体を安置して、遊離した魂が死者の身体に再び還ってくることを願ったのです。今では短期間の通夜の後火葬にしてしまいますが、昔の本を見ると、二年も殯（もがり）を続けた例もあります。家族は復活を祈りながらも、一方でその間に、山つくりという、お墓の準備をするのです。また、魂呼ばい（たまよばひ）というのは、死ぬ間際に家族皆でその人の名前を呼ぶ習慣です。棟に穴をあけたり、屋根などに上ったりして名前を呼ぶ地方もありました。昔は生き返って来るということがあったんでしょうね。

VITALITE
インタビュー

なきがら（死体）は魂（たましい）の入れ物として、傷つけないように大切にしました。脳死を表す言葉は、もともとの日本語にはありませんが、神社界でも研究会などをやっています。原則は、その生死を分かつという伝統的な考えだと思いますよ。

佐多：臨死体験も、最近は医学的に研究されているようです。

白井：実は、私も一昨年手術を受けた時、「麻酔からさめる時には名を呼びますから」と言われて、そんな経験が出来るかと思ったんですよ。トンネルの向こうに見えるきれいなお花畑に行こうとしたら、後ろから名を呼ばれたので帰って来たというような話です。不思議にも、時代や地域を問わず、ほぼ共通しているんですね。いい話ですし、よい機会だと思いましたが、だめでした。

佐多：神道では、生命力の根源のことを「むすひ」と言われるそうですが、これはどういう意味なのですか。

白井：そうですね。産霊（むすひ）という字をあてています。息子（むすこ）とか、御飯を蒸してお餅にする、苔がむすなど、「むす」とは、生まれる、ものが成熟していく、というような意味あいです。生命の霊力を「ひ」といい、合成して産霊（むすひ）というのです。

日本の神話では、神様さえ柿の実のように「なり」ましたと記されています。具体的には「葦牙（あしかび）のごと萌えあがる物」といいまして、水と土と太陽と一体となる泥の中から力強く生命が芽ぶく状態を見て神の誕生を連想しています。神様が生まれ、次いで神が神々を生み、島や木など万物を生み、最後に神を祀る神（人）を生みます。

旧約聖書の創世物語では、神様が土を自分の姿に似せて型どり、息を吹きかけて人を創ります。この創り出すという思想は、ハイテクによって、生命の創造や改変を科学する現代にも生きているのではないでしょうか。

しかしこれは、日本では生まれない思考でしょう。「ち」は争えぬとか、この子は祖父母にそっくりだとか、生まれ変って今生きているという感情が、日本人の底にある考えでしょうね。ロマンがありますね。民族の「ち」を信じられますから。

このような普遍的な生命力を産み出すのが神様の力（ちから）でこの根源を古人は産霊（むすひ）と言ったと考えていいでしょうね。

佐多：先生はよく、「御霊（みたま）の幸（さち）を垂（た）れ給（たま）え」と唱えて「祈る」と話されていますね。

白井：共通の祈りの言葉をもつ宗教もありますが、神道では何と祈ったらいいですかと聞かれることがあります。その時私が私なりに口ずさむ詞はこうですと申します。お詣りする時に手を合せて、真向っている神様の霊力（お力）を頂きたい、と願う意味です。

幸の「さ」は、古い言葉ですが、皐月（さつき）、早苗（さなえ）、早下り（さおり）、早上り（さなぶり）など、若草の萌えあがる季節に使われる、豊かなものを表わす言葉のようです。理解を超えた古い言葉ですが、今も生きています。

幸（さち）と言いますのは、幸福（さいわい）と同類の語でもありますが、現世利益的なものばかりではありません。海幸、山幸の神話にもある大切な言葉です。昔の人は神祭りを行って、収穫を捧げて自然の恵みを感謝しました。今は人工的な「生産」に馴らされています。こうしたハイテクが人間にまで及んでいるのが現代ですね。でも、季節に熟したもの、海川山野の幸（さち）のおいしさは格別です。しあわせを感じます。

私は、人間の尊厳とか生きる意味、権利などが人類全体の今日的命題であることを疑いません。これを決するのは主体でしょうか。相対的に考えるものでしょうか。

人間が動植物と決定的に異なる点は、人間には自己の自覚があることではないでしょうか。「御霊（みたま）の幸（さち）を垂（た）れ給（たま）え」とは、利己だけを考えない“自己の発見”、神道的に言えば、その家の“中今”に生まれて家を継ぎ、後に伝える「ち」のつながりを重視して生きる、そんな心をこめた日本人の祈りと申したらよいでしょうか。